
墮ちる。

曾口十土

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
堕ちる。

【Nコード】
N6864K

【作者名】
曾口十土

【あらすじ】
僕はずっと見つめるだけだった。少しずつ変わっていく透子の姿を。

（前書き）

なんだかカラスの学校みたいな話になっちゃったなあ、とやや反省。

「ほんと、あんたって最っ低！」

透子とっこの怒鳴り声が教室中に響き渡った。騒がしかった休み時間の空気が一瞬凍りついて、みんなの視線が透子に集中する。僕も例外じゃない。友達とのお喋りを中断して、思わず透子の方を向いてしまった。

透子は唇を噛んで佐田に詰め寄っている。よっぱど怒っているのか横顔は血の気が失せて青く見えた。軽くカールさせた髪も逆立ってしまいそうだ。

「でかい声出すなよ、みんな見てるだろ。そういうところが可愛くないんだよな」

佐田は椅子に座って足を組み、うんざりしたように頬杖を突く。そんな気怠げな格好も、笑うと蕩けそうな美形の佐田がやると妙に色気がある。だから、僕みたいに劣等感が勝りがちな人間は、いつそう佐田への不快感が募るのだ。

「可愛くないって……、浮気したのはそっちでしょ。言い訳するなり謝るなりしたらどうなのよ」

「なんで？ 言い寄ってきたのは向こうだぜ。おれがやらせてくれて頼んだわけじゃない。おまえも怒るんじゃない、彼氏がモテルのを自慢したら？」

何というか、とても同じ高校一年生のセリフとは思えなかった。降って湧いたスキャンダルにクラス中が耳をそばだてている。

「おれを他の奴に取られたくなかったらさ、もっとキレイな女になれよな。リップは色気無いし、眉の整え方も甘いし。地味な女は苦手なんだよ」

みんなの耳目を集めておいて、こんなことを傲然と言い放つことができるのが佐田という男だ。高校に入ってからメイクもファッションも急に気合いを入れ始めた透子をバツサリ。見ていて可哀想な

ほどに、透子の手が震えていた。

「なによ、あんだ。わたしがどんな気持ちで」

「気持ちなんか関係ないだろ。おれは美人が好きな。気持ちは見えない、美人は見えるし触れる。OK？」

透子の反応を面白がるように、佐田が首を傾げて笑う。愛嬌はあるけどどこか非情で、やっぱり好きになれない表情だ。

「……別れる」

薄いピンクに染めた唇から絞り出すように言った。静まり返った教室で、透子の声がやけに大きく聞こえる。佐田は慣れた感じで眉一つ動かさず透子を見返した。

「別れる。別れるからね」

「好きなように。おまえの代わりがいなくても思ってるのか？」
安っぽい仮面みたいに透子の顔が固まった。

高校に入学してすぐに透子は佐田に一目惚れしたみたいだった。

付き合い始めたのはたぶん夏休みが始まる少し前だったか。その間の透子の変わりように僕は驚かされた。家が近所で、幼い頃から透子の事を知っているだけに余計に。

中学まではアップにしていた髪を下ろして、ほんの少し茶色に染める。一重の瞼を気にしてか、アイラインもうつすらと。小さな口元にもいつのまにか紅が差されていた。少しずつキレイになって少しずつ知らない顔になっていく透子を、僕はいつしか遠くから眺めるようになっていた。

佐田好みの女に、透子はなろうとしていたのだ。でも、より集めた透子の想いはあっけなくひしゃげてしまった。

静寂を埋めるように、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。葬送を知らせる教会の鐘みたいに空虚でざらついた音色が、透子の背中を叩く。

緊迫した雰囲気は無造作に開かれたドアの音で破られた。

「おい、授業を始めるぞ。もうチャイムは鳴ってるんだ、早く席に着け」

数学教諭の声で、友達と立ち話の格好のまま固まっていた僕も急いで席に向かう。肩を震わせていた透子も、顔を伏せたままで足早に席についた。

なんとなく浮ついた気分のまま授業が始まる。もちろん僕は、先生の話す中身がまったく頭に入ってこなかった。

今じゃ考えられないけど、子どもの頃の透子は木登りが得意だった。

耳にかかる程度の短い髪、タンクトップに半ズボン。顔も細い手足も小麦色に日焼けしていて、透子はよく男の子と間違えられた。

近所の公園のクヌギの樹に、透子はするすると登っていく。そうして幹にとまったアブラゼミを、網も使わずに素手で捕まえるのだ。子どもの時から少し鈍くさいとこのある僕はいつも透子に置いて行かれて、枝に腰掛けた透子の姿を下から見上げていた。

「^{かける}翔、早く登っておいでよ」

「無理だよ。なんで透子はそんなに簡単に登れるの？」

気持ちよさそうに夏の風に吹かれる透子が、僕は本当に眩しかった。

「ふふ、そんなに臆病じゃ大人になれないよ」

透子が楽しそうに笑う。それからせっかく捕まえていたセミを、透子は惜しげもなく投げた。放物線の途中でくると一回転したセミは透き通った羽を広げて、生クリームみたいな雲が横たわる空へと飛び去った。

木の枝からぶら下がった透子の足が危うく揺れる。靴も靴下も脱ぎ捨てた透子の素足はびっくりするほど白くて、僕はどきどきしながら見つめていた。

お伽話に出てくる妖精って、もしかしてこんな姿をしているのかな。幼い僕は木の上で笑う透子を見て、そんなことを考えた。

教壇に立つ先生の声がひたすら空気に溶けていく。透子はぴくりとも動かずに、椅子に座って背中を丸めていた。

透子は泣いているのだと、僕にはなぜだか分かった。斜め後ろに座る僕には顔は見えない。透子は体を固くして、手を握り締めて、そしておそらく涙さえ流さずに、ひっそりと泣いているのだ。誰にも気づかれないよう静かに。

透子の口から佐田についての話を聞いたことはない。というよりも、高校に入ってからまともに話したことすらなかった。心の中に残る原像から少しずつはみだして大人になっていく透子に、僕はどんな言葉をかけていいか分からなかった。

口に出すことはなくても、透子の佐田への恋心は明らかだった。

透子はどんどんキレイになっていった、僕の知らない笑顔を佐田に向ける。軋む心を隠して僕は透子を目で追った。幸せそうに笑う透子の顔が、僕は好きだったから。

さっきの休み時間。もし僕が激昂した透子の前に割って入り佐田を責めたら、透子は少しくらいは救われたのだろうか。「幼馴染みに何するんだ」とか叫びながら。それもただの幼馴染みじゃない。中学以来だんだんと疎遠になって今じゃ挨拶を交わすことも珍しい、シャーペンの芯みたいに細くて脆い絆の幼馴染みだ。そんな弱い縁を頼りに逆上するには、僕は鈍いし慎重過ぎた。そして僕は、また見つめるだけ。僕の心の秤は軋みながらもなんとか均衡を保つ。

透子の背中少しも動かない。声を殺して、体の内側から押し寄せる感情の波にじっと耐えているように見えた。

授業が終わるとすぐに透子は立ち上がった。うつむいて前髪で顔を隠したまま、透子は教室を出て行った。遠くに消えていく寂しげな足音が、僕の頭の中でこだまする。

一方、視界の隅では佐田が振り返って、後ろの男と話していた。

口の端に薄ら笑いを浮かべながら。

「なあなあ、さっきのはちよつとヒドかったんじゃない？」

「いいんだよ、ちょうどあの女にも飽きたとこだったし。しつこくつきまとわれるより、よっほどマシだ」

ふつり。僕のはらわたの底の方で何かが沸いた。去っていく透子の足音と呼応するように、熱が体中に広がっていく。

おい。落ち着けよ。

自分に言い聞かせながら、僕は額の前で両手を結ぶ。目を閉じると幼い頃の透子の顔が自然と脳裏に浮かんだ。

「そんなに臆病じゃ大人になれないよ」

何気ない一言が頭に蘇る。一足先に大人になった透子は、大人の悲しみ背負って、それで、それから、僕は、透子を、透子の姿を……。

その瞬間、心の秤が音を立てて壊れた。

目を開ける。気のせいか教室の風景が赤味がかって見えた。吐き出す息が熱を帯びている。いつのまにか生まれた激情が、全身を抑えようもなく震わせていた。

透子のことは、ひとまず置こう。

その前に、僕はやっておかなくちゃならないことがあるはずだった。

頭の芯に強烈な光が灯ったように、思考が白く押し流されていく。気がつくと僕は佐田の前にいた。

「立てよ、佐田」

「あ？」

「座ったまま殴られるのはカッコ悪いだろ。立つまでは待ってやるよ」

自分の声が寧猛に歪む。

「おまえみたいに鈍くさい奴に何ができるんだよ」

鼻で笑って佐田が椅子から立ち上がる。完全に立つ前に、僕は仕掛けた。

右拳を固めて振り回す。顔面に届く前に、とつさに上げた佐田の手に阻まれた。でもこれはわざと見せた。鈍くさい奴にはそれなりのやり方ってものがあるんだ。

僕は右足を上げて、踵で思いつきり佐田の足を踏みつけた。佐田の口から悲鳴が漏れる。

すかさず僕は体ごと叩きつけるようにして右拳を振った。拳が佐田の頬を捕らえ、肩に重い衝撃が伝わる。近くにいた女の子が恐怖の叫びをあげたけど、構ってはいられない。

尻餅をつくように倒れ込んだ佐田の腹にさらに蹴りをぶち込む。くぐもった佐田の声が聞こえてきた。

さっきの休み時間の比じゃないほど、クラス中が騒然となった。佐田の体が床に転がるのを見ることなく、僕は振り返って教室を出た。初めて振るった暴力は、僕の頭を軽く麻痺させていた。佐田の奴、足首が折れてなければ幸いだ、なんて思ってしまう程度には。急ぎ足で廊下を歩く。透子の行き先にはつきりとした心当たりがあるわけじゃなかった。図書館？ 学食？ 女子トイレ？ 自販機の前？ 透子がいつもどんなとこにいるかなんて、僕は知らない。ただ心の中にある透子のイメージに従って歩いていった。木登りが得意だった透子は、空に近い場所が好きだったから。

階段を上がりきって、重い扉を開ける。透子はそこにいた。

屋上を取り囲む緑色のフェンスに、透子は身を寄せている。頼りない背中の方こうに空の青が広がっていた。制服の白いブラウスが独りぼっちで浮かんた雲みたいだ。

九月の空はどこまでも高かった。今にも透子がフェンスを越えて空へと吸い込まれてしまいそうなほどに。背中に隠した妖精の羽を震わせて、透子が遠くに飛んでいってしまうんじゃないか。僕はそんなふうに静かに恐れた。

足音を殺すようにして透子に近づく。透子の髪を乱した風が僕の顔を撫でて、シャンプーとほんの少しのフレグランスの香りを運んできた。透子の右隣までゆっくり歩いて、僕は金網を右手で掴む。つとめて透子の方を見ないようにして。

「泣いてるでも思ってた？」

感情を潰し切った、驚くほど冷たい声だった。

「あんな大声出して、教室に居づらくなったから逃げてきただけ」
強い日差しに照らされたグレーの街並みが眼下に広がる。透子と遊んだ公園は風景に埋もれてしまつて、どこにあるのか分からなかった。

「男つてさ、落ち込んでる女に優しくしたら、すぐ自分のモノになるとか思ってるでしょ。翔、あんたもそうなの？」

「そんなじゃないよ」

スレた言い方がたまらなく辛かった。棘のある言葉の間には透子の悲しみが挟まつている。

「僕も似たようなものだよ。佐田を殴つて、教室に居づらくなったから逃げてきた」

乾いた風がまた、僕たちの間に吹いた。

透子は何も言わなかった。金網に額をつけるようにしてうつむく。いくらキレイになつても、大人になつても、恋に目覚めても、僕は透子の正体を知っている。透き通った風に吹かれて無邪気に笑う透子の姿は、僕の胸に刻まれているんだ。

荒れ狂った激情が潮のように引いていくと、心の中に残ったのはガラス細工みたいに煌めく透子への恋心だった。僕は、透子が好きだ。

「わたしは、嫌い……」

足下のコンクリートを見つめたまま、透子がつぶやく。

「この一重の目も薄い唇も、女の子らしくなくて嫌い！」

透子が手を振り上げて金網を叩いた。何度も何度も。

「『とうこ』って名前はもっと嫌い。『めぐみ』とか『まい』とか

可愛い名前が良かった。『透子』っていう字も堅苦しくて嫌い」

透子の声が感情に湿っていく。自分を嫌悪するほどに透子を追い込んだのは佐田だ。胸の奥がまた少しひりつく。佐田を殴った固い感触は右手に熱く残っているけれども、もう一発くらい入れておいても良かったかもしれない。なにせ奴は妖精に手を出したのだ。妖精に魔法をかけて大人にして、汚した。

「僕は好きだよ」

金網に背を預けて空を見上げる。澄み切った空から青色が降ってくるようだった。

「『とうこ』って名前の響きも好きだし、『透子』って字も好きだ。透き通った風に吹かれてキラキラ輝いてるみたいで透子にピッタリだと思う」

うつむいていた透子が顔を上げた。

「切れ長の目も好きだ。笑うと目尻が下がって愛嬌のあるところも。小さな唇も、品があって好き」

透子の瞳が揺れる。透子がどんな思いを抱いているのか分からなかったけど、僕はもう少しだけ自分の気持ちを話しておきたかった。「向こうっ気が強いところも、意外と寂しがりなところも、やっぱり好き。だけど……」

真っ直ぐに透子を見つめる。

「僕の勝手なわがままだけど、透子にはこれ以上キレイになってほしくない。少しずつキレイになっていくのを見るたびに、透子が遠くへ行ってしまうような気がして、辛いんだ」

ざわつく階下の教室に、チャイムが鳴り響いた。休み時間が終わる。次の授業科目が何だったか、そんなことはすでに僕の意識の外だ。返答を待つ僕。眩しそうに見返す透子。僕たちの沈黙を濁りのない鐘の音が押しのける。何かが決定的に壊れて何かが新しく始まる、そんな感じの音色だった。

最後の音が宙に尾を引いて、終わる。沈黙が戻りきる前に、透子の丸い頬に一筋の涙が伝った。

くしゃり、透子の顔が歪む。透き通った滴がとめどなくあふれて、次々と頬を濡らした。あわてて透子が目元を拭ったものだから、丁寧に引いたアイラインが落ちかかる。

僕をちらりと見た透子が照れくさそうに笑う。

「へへ……、せっかくキレイにメイクしたのに、これじゃ台無しだよね」

しゃくりあげながら、透子は涙を拭いた。朱に染まった泣き顔からアイラインの黒が解かれていく。少しずつ昔に戻っていくような透子の表情を、僕は思わず美しいと感じてしまった。

無意識のうちに右手を伸べる。透子は逆らうことなく、むしろ僕の掌に頬を寄せてきた。冷えた涙が皮膚を刺し、火照った透子の肌が掌に触れる。温かさを愛おしむように、僕はそっと透子の頬を包み込んだ。

透子は濡れた瞳を閉じ、微笑みを浮かべて僕の掌に頬を預けた。

ふと僕は、透子の口元に目を奪われる。

控えめな唇はうつすらと色のついたリップで飾られていた。だけど、艶気の抜けた今の表情からは浮いていて、まるでピンクの蛍光マーカーで印をつけられたみたいだ。

わずかに眉をしかめる。こんなチャチな色は透子にまったく似合っていない。透き通って輝くように美しい透子の唇は、純朴な朱色がもつともふさわしい。

僕は頬に添えた右手を引く。

「動かないで」

不安げに目を開けた透子に言い聞かせる。透子は戸惑ったように目を泳がせたけれど、身じろぎ一つしなかった。

僕はシャツの袖口で、透子の唇を優しく拭いた。

尖った上唇もぷくりと丸い下唇も丁寧になぞる。ゼリーみたいな透子の唇が柔らかく歪んで、その向こうに隠された白い歯がちらちらと躍った。

「かける、シャツが、汚れちゃうよ……」

「構わない」

この汚れは、佐田が透子につけた汚れだったから。僕のシャツがピンクに汚れることに、透子は美しさを取り戻していく。僕は夢中になって、シャツの布地越しに透子の唇の感触を追った。薄く唇を開いたまま、透子は僕に身を任せた。

化粧の崩れかかった透子の顔は、小さな子どもがクレヨンでために描いたみたいに崩れていた。ひどく醜く彩られた顔に、僕の心臓が大きく鳴った。絶対に他の誰にも見せることのない顔なのだと思うほど、胸の中に言いようのない昂ぶりがあふれていく。憧憬の思いは心の隅に追いやられて、むき出しの望みがかま首をもたげた。

初めて、透子を抱き締めてしまいたいと思った。

今じゃ僕よりも小さくなってしまったその体を、この腕の中に小さく閉じ込めてしまいたい。もう二度と、どこへも行ってしまうなように。

木の枝に腰掛けていた透子が大人になってしまったように、僕も幼いままでいられるはずがなかった。透き通っていたはずの恋心に血のように赤い一滴が垂らされた。それでもなお、僕の心の中で妖しく煌めきを増していく。

見上げるだけの恋が終わったことを、はっきりと悟った。
樹上ではない。透子は僕と同じ高さに、ただ立っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6864k/>

堕ちる。

2010年10月8日14時06分発行